

永和・布施周辺フィールドワーク

《最強のパワーを誇る布施戎神社に秘めたる歴史をさぐる》

《地名の由来》

① 永和（ながにご→えいわ） 「枝郷の 夢破れ 永き和（なごみ）が 今残る」

「永和」は、明治につけられた地名だが、当初は「ながにご」と読んだ。この「ながにご」には深い謂れがあり「永和」に人たちの願いが込められていた。

江戸時代には横沼、長堂、三ノ瀬が荒川村に属していた（枝郷・村内の集落）が、明治6年（1873）になり一つ村として認知され独立したいという希望が江戸時代（天保9年、幕府の巡察使に嘆願書）より有り、ときの堺県令税所篤（さいしょあつし）はこの要望を入れて荒川村から分離して一村とし、永久に平和であるようと、「永和」と名付けた上、読み方を「ながにご」とした。

しかし、明治20年の頃、長堂は東足代村に、三ノ瀬は荒川村に合併し、「なごにご」は旧横沼だけになった。「なごにご」は永和（えいわ）に変わった。

明治21年（1888）、国は市制・町村制を発布。翌年、東足代、太平寺、荒川、岸田堂、菱屋西新田そして永和の各村が合併して布施村となり、新たな戸長が置かれた。村名も、大阪府布施村大字永和となる。

大正3年、三つの村の産土神を祀る神社は、足代（現、布施戎神社）から荒川村、鹿島神社に遷座してきた延喜式内社・都留弥神社に合祀された。（明治22年頃の地図 陸地測量部）

② 足代

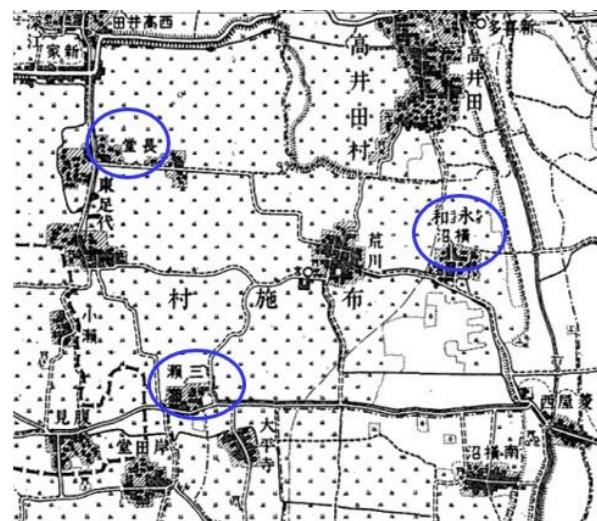
地名については、その由来を示すような古い神社や史跡など見あたらない。しかし、実は衣摺等の地名と並んで東大阪の中でも古い地名ではと考えられる。四天王寺創立の経緯を示した「四天王寺御手印縁起」（国宝）に物部守屋と蘇我馬子との戦いで敗れた広大な守屋の所領が蘇我氏方であった厩戸皇子の所領となった。その中に「足代地一渋川郡梓里」とある。

この足代地域は、今から6000年前頃（縄文前期）には入り込んだ大きな湾になっていた。人々が住み始めた弥生期には、葦の生い茂る湿地帯に変わっていたと思われる。川の浅瀬に竹や木・葦をあみ連ねて魚を獲る仕掛けを網代とよび地名の足代は、魚を獲る網代が足代に変化したものか。

中世には足代荘という荘園があり繁栄した。さらに江戸時代になると街道の往来が盛んになりこの足代は奈良街道と十三街道、放出街道（剣街道、中高野街道）の分岐点として交通の要所になっていた。特に奈良街道は大阪玉造から、御厨、吉田、豊浦、暗峠を経て奈良・三条に至る本街道で、大和、伊勢に向かう旅人で大変賑わい、この時代、足代から深江一帯で作られた笠（足代笠）などの菅製品が特産物として知られた。伊勢参りをする旅人たちにこの菅笠は大変重宝がられ旅人は争って菅笠を買ったといわれている。

・十三街道 大阪・玉造を起点に足代まで重複。八尾の神立、玉祖神社、十三峠を越えて斑鳩町の竜田までの街道。クレアホール前の細い道が十三街道への分岐地。上小阪、若江南を通り八尾に至る。

・放出街道 中高野街道ともいわれた。北は、守口市の京街道、南は狭山市の西高野街道に繋がっている放出から昔の摂津国と河内国の境界に沿って、南北に蛇行して生野区巽を経て平野に至る道で、剣街道とも呼ばれていた。



③ 岸田堂 「岸田にはお堂あり、近江堂、瓜生堂にはお堂なし」



(河内国細見図 安永5年・1776)

岸田堂を地元の人は「キシナドウ」と呼んでいたようだが、大今里の暗越奈良街道脇にある文化8年（1800）の道標に「右きしのだうくハんぜをん」とある。

この辺りも古代においては土地が低く長瀬川や平野川が氾濫し野原が広がっていたと思われる。「岸」または、「岸田」は地形から付けられた名で、「堂」は慈眼山長樂寺と言われている。長樂寺は東西60m、南北36mと敷地が広く、本堂、鐘楼、庫裏などの建物があった立派なお寺であって、建治3年（1277）銘の梵鐘もあった。

伝えによれば寺は推古天皇の創建、本尊の十一面觀音菩薩は聖徳太子、または快慶の作といい、疱瘡（天然痘）を治す仏様として有名で信仰を集めていた。

江戸時代は黄檗宗万福寺（隱元禪師）の末寺（初代住職松井宗峰師）となり、明治になって神戸に移築された。明治になると種痘が広がり、疱瘡除けの信仰も薄れ明治21年（1888）廃寺となり、後に關帝廟となった。



《宮ノ下貝塚遺跡》 布施・イオン周辺の縄文後期遺跡

古代河内潟南岸、現在の布施駅北側一帯に「宮ノ下遺跡」（縄文後期～弥生期の貝塚遺跡）が広がっていた。

貝塚は、貝層20cm～1mの厚さで東西10m、南北25mの広さがあり、淡水産（セタシジミ、タニシ）汽水産（カキ、ヤマトシジミ）の貝殻。海水産（ハマグリ、イシダイ、サワラ、ボラ）の貝や魚骨とスッポンの骨。イノシシなどの獣骨が出土し、古い縄文時代からの漁撈活動の実態と徐々に淡水化した実態が明らかになっている。凸帯文土器、縄文期の舟橋・長原式土器、滋賀里Ⅲ式土器等が、そして、東北地方に多くの発掘例のある独鉛石が出土している。

貝塚の形成は、弥生中期中葉（2000年前）に終わるが、集落をあげての全面

的稻作農耕が行われていたことは中期後半の掘立柱建物、杭列、土墳墓、木棺墓が検出されていることからも分かる。

1500年程前には、旧大和川河口付近、今の足代には都留弥神社が鎮座していたと思われる。また、近接する長堂あたりには葛城・御所から移住した鴨氏・加茂氏が崇敬していた大鴨積命を祭神とする鴨高田神社が鎮座していた。

葛城川が大和川に合流するように、開発の神であるこの神を奉戴していた葛城の古代氏族が、実は、5～6世紀初頭まで河内潟湖、周縁地を開発、支配していたと考えられている。



《フィールドワーク》

① 鴨高田神社（式内社）

祭神は、素戔鳴命に大鴨積命と神功皇后、応神天皇の四神を祀っている。創建は、白鳳2年（673）と伝えられており、延喜式内社で、渋川郡六座の筆頭に位置する官幣小社であった。

古代の河内は川が運ぶ土砂などで河内湖がどんどん陸地化していた。人々は生駒山麓や湿地帯の高いところに居住し農耕を営んでいたと思われる。ここに居住していた鴨氏の祖先神を祀ったことが神社の始まりで社名はそれに由来すると言われている。

鴨氏とは、加茂・賀茂・甘茂ともいい、「古事記」では崇神天皇の時、流行する疫病を鎮めるために御諸山（みもろやま・三輪山）に意富美和之大神（おほみわのおほかみ・古事記での神名）を祀った大物主大神（日本書紀の神名）の四世孫、意富多泥古を神君とともに始祖とする、と記されている。三輪の大物主大神の子孫である鴨氏は三輪氏のように大和に居住せず、河内、摂津、葛城、紀ノ川流域を拠点としていたようだ。

中世の鴨高田神社は石清水八幡宮領として河内国高井田庄の名があり、八幡宮と称されていた。

約400年前、この付近一帯が戦場となった大阪夏の陣（元和元年・1615）の兵火に巻き込まれ社殿の残念ながら全てが焼失したが、数年を経て再建されたのが現在の本殿である。

境内にある石造物として正面鳥居横に享保13年（1728）銘の石灯籠一対、拝殿前の安永3年（1774）銘の石灯籠一対がありいずれも「八幡宮」の文字が彫られている。そして、本殿前には寛政9年（1797）銘の狛犬がある。本殿西側にある古木は「お駒樟」といわれ、今は枯れて幹が少し残っている程度だが、千年経ったものといわれている。これらのこととは、鴨高田神社の歴史の古さと由緒の深さを物語っている。



《阿遼速雄神社》 古代、河内潟の対岸に鎮座する式内社

主祭神は、味耜高彦根神（あじすきたかひこね）。現在は草薙剣の分靈正一位八剣大明神を配祀する。往古は八剣（やつるぎ）大明神と称したという。



葛城の地には、「鴨族」と呼ばれる古代豪族が弥生時代の中頃から大きな勢力を持っていた。葛城の鴨都波神社は、宮中八神の一社にして鎮魂の祭礼を行う延喜式内名神大社である。創建は、第10崇神天皇の時代に大国主命第11世太田田根子の孫、大賀茂都美命（大鴨積命）に奉斎されたのが始めとされている。

鴨都波神社の主祭神「積羽八重事代主命（つわやえことしろぬしのみこと）」と阿遼鉤高日子根神（あじすきたかひこね）は、大国主命の子どもにあたる神。事代主命と味耜高彦根神は「鴨氏」が信仰していた神であった。

社伝によれば、天智天皇7年（668）に熱田神宮の草薙剣を盗みだした新羅の沙門道行は、当地付近で暴風雨に遭遇したことから、神罰をおそれて草薙剣を投げてた。この草薙剣は一時当社が預かり、その後、宮中に保管されたが、やがて、朱鳥元年（686）天武天皇の病が草薙剣の祟りと見なされ、草薙剣は熱田社（現熱田神宮）に移されている。

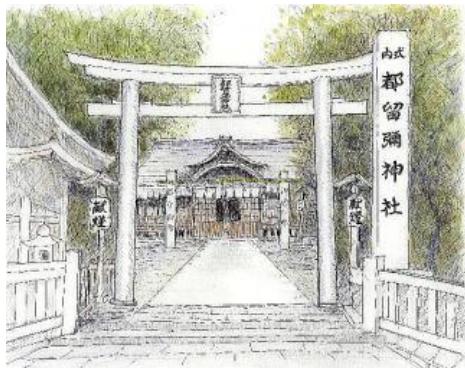
近世には放出村の産土神となった。例祭日の10月22日には熱田神宮より代表者が参拝し、同宮の例祭日6月5日には当社の代表が参拝するという。境内の北東隅に菖蒲池がある。往時は7月9日の夏祭、現在は5月5日に菖蒲刈神事を行う。災難除けの菖蒲と伝える。境内の細砂は脚の病気に効験ありとする。

樟の大樹は白竜大権現を祀る神木で、遠方からも望見できる。府の天然記念物。

② 都留彌神社（式内社） 社紋は唐草花菱

都留彌神社は、もともとは足代（現在の布施戎神社）にあったもの。明治40年（1907）から始まった、国の神社合祀政策（一村一社）により、大正3年、明治22年に合併した布施村旧村の八つの神社を合祀して旧荒川村村社鹿島神社の社地であった現在地に移した。

祭神は速秋津日子神、速秋津比売神、菅原道真、推古天皇。素戔男尊（長堂・元大歳神社）、豊受姫神（菱屋西・元稻荷神社）、少彦名命（岸田堂・元天神社）、武甕槌命（荒川・元鹿島神社）、保食神（うけもちのかみ）。他に、永和（北横沼）、太平寺の子守神社（三穂彦命・水分の神）を合祀。



合祀前、足代（現在の布施戎神社）にあった都留彌神社は、明治18年（1885）の淀川大洪水により、神殿・宝物・古文書などすべてを流失し、その後、村民の手により再建されて、足代村の氏神社として祀られてきた。

祭神の速秋津日子神、速秋津比売神は港、河口の守り神といわれている。後に、雨乞い・農耕の神として崇敬されてきた。速秋津日子神、速秋津比売神は天之水分神・国之水分神等の神を誕生させている。

社号については、由緒書には、「第60代醍醐天皇の延喜十庚午（かのえうま）年は春の中旬より夏至にかけて聊（いささ）かも降雨なく、河水細り井水涸れ毎日赫灼（かくしゃく）たる旱天続きにて田植すること叶はず、天皇はこのことを聞し召され深く愍（あわれ）み給ひ河内國に12社を撰定し、勅使を遣はされて5月23日より雨乞の御祈願をなされた御祈り空しからず神應ありて、同月25日に至ると大雨降り来て甘水田畠にうるをし喜びの声國々に満ちた、その後続いて順雨あり連年豊作が相続いたと云う。天皇もこの奇蹟に御感ありて親しく御拝あらせられ、此時に「都留彌」神社の社号を賜はり従五位上が贈られた。」と、ある。

また、一説に速秋津日子神、速秋津比売神は港、海の神と川の神。古大和川口にあった一対の島があり夫婦が祭神でもあるから「つるむ」都留美島から都留彌に転訛したともいう。

③ 念通寺、道しるべ

念通寺は遙向山と号し浄土真宗大谷派の寺院である。開基は戦国時代が終わろうとしていた慶長年間（1596～1614）といわれている。尾張の武士であった開祖が長く続いた戦乱を嫌い、仏門に入り荒川に小さな庵を結んだ後、教如上人が宣如上人の時代に浄土真宗の道場となったようだ。住職の姓が尾野田氏。尾張から来た野田氏ということのようだ。

本尊は制作年代不詳だが古い木像の阿弥陀仏である。また、聖徳太子立像が祀られている。

念通寺の前に道標（道しるべ）がある。「左 十三ニ糸」「南 ひらの」「右 大坂」の文字が認められる。この東西の道が昔の十三街道であることが伺える。十三街道は、摂津玉造を起点とする「暗峠越奈良街道」と深江で分岐し河内足代村に入る。ここから更に東進し、荒川から菱江西で長瀬川を渡り、上小阪、若江南に至り、河内街道を少し南に歩き西郡に入り、玉串川を越えて福万寺、次に恩地川を越えて高安山麓の楽音寺で東高野街道と交差、それから山麓を登り勢野、竜田に至り法隆寺、伊勢に通する道である。

④ 都留彌神社跡地に鎮座する布施戎神社

《最強のパワーを誇る布施戎神社に秘めたる歴史》

都留彌神社が移転した時に、境内地は、地元足代の有志へ払い下げられ、民有共有地として保管されてきた。この由緒ある境内地跡に、地元の要望に従い、昭和29年（1954）西宮神社から戎大神（蛭子・ひるこの尊）の御靈代（みたましろ）を勧請して布施戎神社の祭祀が始まった。

周辺地域が商業地として発展するにともない、更に昭和63年（1988）には大阪の今宮戎神社（事代主命）を勧請した。以来厳粛な祭祀を執行して以来、参拝者も飛躍的に増加し、毎年1月9日、10日、11日の十日戎には商売繁盛を願う参拝者が群れをなし、境内地は身動きができないほど賑わいとなっている。



三つ柏・西宮神社

蔓柏・今宮戎神社



主祭神のえびすは漁業や海上安全、特に商売繁盛の神様で有名で、庶民に親しみ深く大変人気がある。「えびす」には戎・恵美須・恵比寿・恵比須・胡などの漢字も当てられているが、恵比寿そのものが異邦人を意味する言葉で、異郷から来臨して幸せをもたらす客神であったものと考えられている。

西宮神社（戎社3500社の総本社）の祭神、「えびす神」の中でも一番古くから語られているが、『古事記』『日本書紀』の国生みの条に登場する蛭子（ひるこ）の神。この神は、伊弉諾（いざなぎ）伊弉冉（いざなみ）の神が日本本土を創世する際に、その第一子として誕生したが、手足の不自由な障害者と描かれ、天磐樟船（あめのいわくすぶね）に乗せられ捨てられ自凝（おのころ）島（淡路、御原）から流されてしまう。」と記されている。流された蛭子神が流れ着いたという伝説は

日本各地に残っているが、漂着物を「えびす神」として信仰するところが多い。

西宮に鎮座したのは、「茅渟の海と云われた大阪湾の、神戸和田岬の沖より出現された神像を、鳴尾の漁師がお祀りしていましたが、神託によりそこから西の方、この西宮に遷し、祀られたことに起源を発しています。」という。後に、鎌倉時代の『源平盛衰記』には次のような記事が登場する。

「蛭子は3年迄足立たぬ尊とておはしければ、天磐樟船に乗せ奉り、大海が原に推し出されて流され給ひしが摂津の国に流れよりて、海を領する神となりて、戎三郎殿と顕れ給うて、西宮におはします。」

すでに鎌倉時代には、このように、蛭子（ひるこ）神が「えびす神」という認識がなされていたようだ。

また、今宮戎神社の事代主神ニハ重事代主神が「えびす神」という説がある。この神は『古事記』『日本書紀』によると大国主命の御子神であるとされている。

「事代主は、葦原中国平定において、武甕槌命（たけみかづち）らが大国主に対し国譲りを迫ると、大国主は美保ヶ崎で漁をしている息子の事代主が答えると言った。そこで武甕槌命が美保ヶ崎へ行き事代主に国譲りを迫ると、事代主は「承知した」と答え、船を踏み傾け、手を逆さに打って青柴垣に変えて、その中に隠れてしまった」。漁をしていた神様だから、よく鯛を持った姿で描かれるいすれにも船に乗っており、海辺で魚釣りを楽しんでいたように伝えられており、その様子がえびす様の神影の釣り姿と結びつくところから「えびす神」の神格に繋がったようだ。

ではなぜ、布施えびす神社が事代主神を勧請したこと、布施えびす神社は大繁盛、町を活気づけることができたのか。

実は、えびす神となった事代主神は元来「鴨氏」が信仰していた神であるということ。

現代、加茂氏、末裔含め多くの方が布施・長堂周辺に居住されている。祖先神の事代主命・えびす神を勧請したこと、都留弥＝「対るむ」神と人々をつなぐ土地の持つ靈力と開発神・事代主と奉賛してきた子孫達のパワーが相乗作用をもたらし、大きなパワーを創り出されたと考えることも可能ではないか。

布施えびす神社の興隆には、意外な繋がりが見て歴史のおもしろさを感じる。

⑤ 足代安産地蔵菩薩

傍の略記によると、「東足代北町の聖源寺（明治5年に廃寺）境内、その付近の辻などに祀られていた。

昭和5年(1930)5月に始めて祠堂を建立し祀った。地蔵菩薩像の材質は、安山岩製で高さ60cm、幅36cm、奥行き30cmの自然石の表面に右手に錫状、左手に宝珠を持ち、直径23cmの光背を有する像高41cmの地蔵立像が蓮座上に薄肉に彫出する。室町時代末期の作品で、胸間連珠の瓔珞（ようらく 首飾り）が刻まれている。刻銘は、中央の立像の両脇に向かって右に「永禄五（1562年）壬戌（みずのえいぬ）十月二十四日」、また向かって左には、「河内国淡川郡足代庄衆生」と印刻されている。」という。昭和43年に東大阪市有形文化財（彫刻）に指定されている。



«足代地車» 2001年新調された地車。布施周辺では唯一。

«元禄寿司» 昭和33年(1958)「廻る元禄寿司1号店」故・白石義明がビール工場の製造に使われているベルトコンベアにヒントを得て開発した「旋回式食事台」が始まり。

⑥ 「いちでうばし」親柱

昔「フラワーロード本町」商店街は「川」であった。現在は道路であるが大和川付け替え以前は「剣先舟が行きかう大きな川であった」と言われている。

放出街道は暗峠街道と交差するあたりから北へ攝津の国と河内の国との境の上に重なり伸びている。国境は川であったかして、その上に作られた道路も同様に異常に蛇行している。この状態は長瀬川本流に戻るまで続いている。

一方南は「フラワーロード本町」商店街の道は、S字カーブ示し「もとは川でしたよ～」と言わんばかり。その先は「三ノ瀬公園」に至り公園を抜けて、「寿町」交差点に至り、さらに旧の柏田村。そして、このあたりで「本流である長瀬川」に接続されていたのだろうと想定されている。大和川の付け替え(宝永元・1704)後は、元本流あつた「長瀬川」の水量が減り、細々とした農業用水路的な川に変わっていった。



«「いちでうばし」架橋と大阪軌道鉄道「深江」駅(近鉄奈良線)»

大正3年(1914)上六～奈良間開通、駅名は「深江」、駅位置は現「布施」駅より西200m先。大正11年には駅名「足代」に変更。大正13年(1924)大阪線開通に合わせて「足代」駅を200m東に移行(現在の布施駅位置に至る)翌年、「布施」に変更。

大軌奈良線が開通したとき、布施村は十三街道から道を分岐させ「深江駅」まで直線道路を引くことにした。この道は、後に「フラワーロード本町商店街」となる川を越さなければならない。橋も作り「いちでうはし」と名付けられている。開通から10年後、大阪線を作ることになり、分岐点は「足代駅」から東方200m先で、そこに規模の大きい新駅舎を立てた。旧駅舎は廃止になり、これ以降「いちでうはし」及びそれより西への通行は途絶え橋の使命は終わった。しかし、橋の撤去はこの時ではないと思う。たぶん、現在「放出街道」である以前の川がその使命をなくし、堤で埋められたときであると思われる。